

VISTA 6 ユーザーレポート

株式会社宮崎放送 様

VISTA 6

テレビスタジオに VISTA 6 を導入



株式会社宮崎放送
技術局 制作技術部
高見 康史

テレビスタジオ

宮崎放送のテレビスタジオは1つしかありません。その1つのスタジオはウイークデーの朝と晩に生放送があります。その間には番組収録もあります。使用期間が20年にもなる音声卓は、国産の39chアナログ卓でした。2004年7月には開局50周年を迎え、6時間の生放送をしましたが、その際はフェーダー数が不足したため、12chミキサーをサブ卓に用意し運用しました。また、宮崎放送では効果卓というものは無く、ワンマンオペレートで運用していますので、マイク回線以外にも周辺機器のラインモジュールをたくさん使用してきました。



今回、サブを更新することが決まり、いろいろと悩みました。今までの使用感からすると、アナログ卓が使いやすいに決まっている。デジタル卓は未知の世界である。しかし、デジタル卓にもたくさんのメリットを感じる。今後、地上波デジタル放送がはじまり、番組、音声フォーマットの多様化に対応できるようにするためにはデジタル卓しかないと考えました。

リスニングポイントの重要性

デジタル卓と言っても多種多様で、選択に迷うところでした。音声研修会等で様々なデジタル卓に触れ使用感を探りました。そして音声を調整するにあたり、リスニングポイントが非常に重要であることが解かりました。VISTAシリーズは、レイヤーチェンジに加え左右にスクロールするため、まさに一番良いリスニングポイントを維持したままの調整が可能でした。VISTAシリーズには6, 7, 8があります。今回のサブ更新を考え始めた時は、8は未発表でしたが、7か6かの選択には迷いました。オートメーション機能が必要なのか必要でないのか？しかし、生放送卓ということを第一に考慮し、少しでもシンプルさを求めてVISTA6を選択しました。VISTAシリーズはパンフレット等で見たとおりメチャクチャカッコ良いです。他には無いデザインです。使用する者にとってデザインは最優先項目ではないけれども重要な

ファクターです。VISTA6が納入されてから、音声スタッフ以外の人も音声卓に興味を持つようになりました。また、今回の更新で5.1chサラウンド制作が可能になりましたが、サラウンド制作ではステレオ制作以上にリスニングポイントがシビアになる事が解かり、VISTAシリーズの良さを実感しています。

稼働から1週間

今回、VISTA6を使用し始めて1週間になりました。最初はアナログ卓から世代を飛び越しすぎたかのように戸惑いを感じましたが、使用4日目くらいからVistonicsにも慣れ、安心してオペレーション出来るようになりました。まだまだ機能を秘めているVISTA6ですが、さらに使いこなせるよういろんな事を試しながら音作りをしていきたいと思っています。

